

ものと考えられた。

無症候の CLBBB における, Ex-TI での upper septum の defect の成因に関しては, こうした症例でしばしばみられる septal summit 近辺の fibrosis によるものか, Hirzel らの述べる asynchronous septal motion が septum に虚血をひきおこすことによるかは不明であるが, Ex-TI の解釈上, 十分注意を払う必要があることを示した。

17. 当院におけるタリウム心筋シンチと心電図による虚血の検出率の検討

澤村 松彦	木之下正彦	西川 俊介	
本村 正一	尾藤 慶三	河北 成一	
		(滋賀医大・一内)	
鈴木 輝康	藪本 栄三		(同・放)
本多 達哉	池本 嘉範	増田 一孝	
		(同・中放)	

タリウム心筋シンチの虚血の検出率について心電図と比較検討した。対象は冠状動脈に有意な狭窄を有する狭心症の 30 例, 対照の 30 例, 貫壁性心筋梗塞の 35 例, 心内膜下梗塞の 9 例で計 104 例であった。検出率は狭心症群では運動負荷心筋シンチ (ET) で 70%, トレッドミルテスト (EE) で 80% であった。対照群ではおのの 80%, 70% であった。貫壁性心筋梗塞群では安静時心筋シンチ (RT) にて 83%, 安静時心電図 (RE) で 94% の検出率で, 心内膜下梗塞群では RT, RE とともに 56% の検出率であった。狭心症例の罹患病変数について比較すると, 3 枝病変例で検出率は ET で 71%, EE で 100%, 2 枝病変例では ET, EE とともに 67%, 1 枝病変例では ET で 71%, EE で 79% であった。また狭心症例での冠状動脈支配領域別の検出率では, RCA 領域 50%, LAD 領域 59%, LCX 領域 23% であった。貫壁性心筋梗塞例の冠状動脈支配領域別の検出率では, RT で, RCA 領域 76%, LAD 領域 81%, LCX 領域 57% であった。RE では RCA 領域 100%, LAD 領域 76%, LCX 領域 57% であった。次に心筋シンチと心電図診断が一致した症例は, 狭心症群で 30 例中 21 例, 貫壁性心筋梗塞群で 35 例中 28 例, 心内膜下梗塞群で 9 例中 2 例, そして対照群で 30 例中 15 例であった。以上より狭心症群では ET よりも EE の方が検出率は高く, 対照群では ET の方が高かった。また心筋シンチと心電図の両法を用いることに診断を高める結果を得た。なお

冠状動脈の支配領域に関しては, LAD, RCA 領域の方が LCX 領域よりも検出率は高かった。

18. 非典型的胸痛をきたし, 負荷心電図が異常を示した, 心筋シンチグラム所見

伊藤 秀臣	山口 晴二	枋尾 人司	
才木 康彦	比嘉 敏明	池窪 勝治	
		(神戸中央市民病院・核)	
加藤 洋	吉川 純一		(同・内)
千田 道雄	玉木 長良		(京大・放核)

社会におけるストレスの増加とともに, atypical chest pain を始めとして心臓神経症を思わせる患者が増加し, 真の虚血性心疾患か否かの鑑別は日常診療における重大な課題となってきた。最近, 胸痛と異常負荷心電図所見を有しながら, 正常冠動脈例が高率に認められた。そこで, 本院において過去 1 年間の胸痛と異常負荷心電図所見を有した症例の冠動脈造影所見, ^{201}Tl 負荷心筋シンチ所見を検討した。

対象は, atypical chest pain 8 例, typical chest pain 20 例である。Atypical chest pain 8 例中, 負荷心筋シンチで異常を認めなかった 6 例はいずれも正常冠動脈であった。Spasm を除く typical chest pain 14 例中, 正常負荷心筋シンチを呈した 5 例も正常冠動脈であった。

Atypical chest pain で異常負荷心筋シンチを呈した 2 例中 1 例は正常冠動脈, 1 例は 18 歳の女性で, 負荷心筋シンチで前壁中隔に取り込みの低下がみられ, 同部の redistribution が認められた。冠動脈造影で左右冠動脈起始部の狭窄が認められ, 手術所見より大動脈起始部に局限した大動脈炎症候群による冠動脈狭窄であった。

結 語

1) 負荷心電図に負荷心筋シンチを加えることにより虚血性心疾患の specificity が高まった。

2) 特に atypical chest pain 例で, 負荷心筋シンチで異常がなければ冠動脈造影は不要であると思われた。